

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380657

研究課題名(和文) 日本サブカルチャーのグローバル化と冷戦後ドイツの文化変容に関する社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological Studies on the globalization of Japanese subculture and its relevance with the cultural transformation of German popculture after cold war

研究代表者

北田 暁大 (kitada, akihiro)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：10313066

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：当該研究については、ドイツにおける日本サブカルチャーの受容者へのインタビュー、識者との意見交換、ドイツでの雑誌、マンガ研究などの資料収集、日本コンテンツに知悉したドイツ人識者を交えたシンポジウムの実施、それを踏まえた日独ウェブ調査の立案・実施と分析、といった研究計画に記載した内容を首尾よく実施したうえで、2014年には、関連する比較文化社会論をめぐるワークショップをドイツ(ライプツィヒ大、ボン大)にて開催、また、成果に関連する内容をエアランゲン大学のシンポジウムにて発表した。の計量調査から、社会意識と文化受容の関連性の日独の差異を、とりわけ歴史意識・認識に定位して明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I focused on three points. (1)Interviews with the Audience of Japanese subculture in Germany and the Research of their life world.(2)Research for the survey materials in Germany which is concerned with Manga,Anime of Japan.(3)Symposium and discussion with the German art coordinator who has dealt with Japanese popculture. (4)the survey Research of "Comparison of social conscious from the view of cultural sociology.

研究分野：社会学

キーワード：サブカルチャー 歴史認識 文化社会学 ドイツ現代文化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、クールジャパン的コンテンツと呼ばれる日本のサブカルチャーの国外(独)での展開が、米サブカルチャー(音楽や映画)などが辿っているグローバル化のあり方と異なる様相を呈しているという仮説を、質的・量的なデータをもとに検証し、(英語圏文化と異なる)もう一つのグローバル化のあり方について理論的・経験的に考察することを目的とする。さらに 00 年代以降の本格的な文化グローバル化に先立ち、90 年代に冷戦の終結による西側文化の浸透を体験し、いわば短期間に二度の激しいグローバル化を体験した東独地域に注目し、そこでの文化受容の世代差、日本サブカルチャーへの対応の異同等について考察し、冷戦以降の文化グローバル化の複層的な位層を描き出すことを目指す。

2. 研究の目的

本研究は、クールジャパン的コンテンツと呼ばれる日本のサブカルチャーの国外(独)での展開が、米サブカルチャー(音楽や映画)などが辿っているグローバル化のあり方と異なる様相を呈しているという仮説を、質的・量的なデータをもとに検証し、(英語圏文化と異なる)もう一つのグローバル化のあり方について理論的・経験的に考察することを目的とする。さらに 00 年代以降の本格的な文化グローバル化に先立ち、90 年代に冷戦の終結による西側文化の浸透を体験し、いわば短期間に二度の激しいグローバル化を体験した東独地域に注目し、そこでの文化受容の世代差、日本サブカルチャーへの対応の異同等について考察し、冷戦以降の文化グローバル化の複層的な位層を描き出すことを目指した。

本研究は、しばしば「クールジャパン」といった呼称を与えられている日本のサブカルチャー(マンガ、アニメ、ゲーム、音楽等)が、東西ドイツおよび東欧地域において受容されている過程の精細な歴史的・質的調査を通して、

「クールジャパン」をめぐる言説(否定的なものであれ肯定的なものであれ)が前提としている文化グローバリゼーション論の枠組みを問い直すとともに、

20 年来の急速な政治的・経済的・文化的グローバル化を経験している旧東欧地域の都市文化、若者文化において、マンガやアニメ、ゲーム等のサブカルチャーが果たしている文化的・社会的機能をあきらかにし、

最終的には、「西側(米、英、仏、旧西独)」的な観点から論じられてきた日本コンテンツのグローバリゼーション論を組み替えていくこと

を目的とし、その一定の成果は得られたものと考えられる。また、

冷戦後の東西統合をもっとも緊張感をともなつて体験してきた東/西ドイツと日本におけるサブカルチャー受容の差異に関して計量調査を行い、グローバル化において日本サブカルチャーが持つ政治的・社会的意味と機能の比較社会的考察を行い、「日本」「冷戦後ドイツ(および東欧)」「サブカルチャー」の関連を総合的かつ実証的にあきらかにしていく、

グローバリゼーション論に対する批判として提示されている Luhmann, N の世界社会(Weltgesellschaft)論を経験的研究の水準において検証していくこと[グローバリゼーション論]、

「クールジャパン的」コンテンツの受容形式 受容・解釈の内容ではなくの様相に照準して、欧米サブカルチャー(映画・音楽)と日本「オタク」的コンテンツの受容様式、受容者の社会的ネットワークの構成の仕方の差異を分節すること、および、

平成 19 年～平成 22 年科研費研究で計量的に検討した「文化・趣味」理論 Bourdieu の文化資本論の経験的応用の可能性についての批判的研究の国際比較の可能性を検証すること、

を目的とした。いずれの目的項目に関しても一定の成果を得ることができた。

3. 研究の方法

本研究においては、主として 6 つの研究手法を用いた。

第一に、まずドイツ在住の「オタク」コミュニティに属する若者にインタビューを試み、かれらの日本、日本サブカルチャーについての捉えた方について検討した。またあわせてメッセ(見本市)において専門コーナーが設けられている「アニメ・マンガ・二次創作」の展示・販売を視察。あわせて二次創作作家にインタビューを行い、二次創作文献について収拾した。

第二に、本研究において一番ウェイトのかかるウェブ調査の質問文検討のため、ドイツにて関連文献や雑誌、インタビューなどを行い、日本と対比する場合にどのような設問項目が妥当であるか、どのようなジャンル設定が適切であるかについて精査した。

第三に、上記研究目的にあるように、文化社会学としての理論的な深度を追究するために、ドイツにおける文化社会学、メディア研究、日本学、ルーマン研究などを渉猟した。ドイツにおいてもメディアやコンテンツを扱う学問は様々に分岐しており、それらの議論の配置図を構成し、本研究の学術的意義の理論的基盤について考察した。

第四に、ドイツ在住の「アニメ」に強い関

心を寄せるアーティストやアートコーディネーターと意見交換をし、かれらの視点が「アートワールド」と「アニメ・マンガ」のあいだにおいてどのように成り立っているのか、を考察した。海外では日本のアニメーションは「アート」として受け取られている部分もあるので、第一の方法によってアクセスしうる調査協力者とは異なる水準での「日本サブカルチャーのグローバル化」を検討することを目的としたものである。またこの際に、より多くのドイツ在住者、日本人の見解を知るためにドイツや日本においてワークショップやシンポジウムを行った。

第五に、以上のような作業を経て、日独比較調査を設計し、実施した。元となるものは、2009-2011年科研費研究「サブカルチャー資本と若者の社交性についての計量社会学的研究」で実施した調査であったが、日独の文化状況の違いや、2015年に深刻化する移民問題、排外主義の問題等を織り込むために、質問項目設計は慎重に行った。この調査は、日/旧西独/旧東独の比較考察を狙ったものであり、年代的にも「冷戦を生きた世代」から「冷戦を知らない世代」まで広がりをもたせた。

4. 研究成果

各年度ごとに以下のような研究を行い、成果を得た。

【2013年度】

(1) 現在のドイツにおける日本文化(サブカルチャー)受容について、現地にて、書籍、論文などを渉猟し、現下のドイツ都市部におけるサブカルチャー受容および、その研究において精査すると同時に、(2) 日本サブカルチャーを愛好するドイツの若者に対してインタビュー調査を行った。(3) また、ライプツィヒ・メッセの「日本サブカルチャー」の展示場に足を運び、同人誌を発行している現地の若者にインタビューするとともに、そこで販売されている同人誌等を購入し、精査した。

(1) によって、現下問題となっているドイツにおけるサブカルチャー受容の実態・研究動向を把握し、翌年度の本調査の質問項目設定の素案を作成した。この際、科研費申請書類にも記した文化研究者ファビアン・シェーファー教授(エアランゲン大学)とたびたび議論を交わし、ドイツにおける「日本文化」受容の問題点と特質について考察した。さらに、ベルリンフンボルト大学日本学科のハラルド・ザロモン氏、ベルリン森鷗外記念館のベアテ・ヴォンデ氏と将来的な研究協力について意見交換をかわした。

(2) については、ライプツィヒ在住のドイツ人、在独中国人へのインタビュー調査を行い、「オタク」的な日本文化がどのような形でドイツで受容され、概念化されているについて詳細な情報を得た。次年度もこうしたインタビュー調査を広げていき、ドイツにおける日本サブカルチャーの位置価についての

考察を深めることとしたい。

(3) もまた(2)と同様に、次年度のウェブ調査の精度を高めるために重要な準備作業であった。日本のサブカルチャーに影響を受けた同人誌著者や、コスプレを行うドイツ人にインタビューを行い、日本サブカルチャーの受容の実態について考察した。

【2014年度】

2014年度は、最終的なアンケート調査に向けて引き続き聞き取り調査および情報収集を行い、アンケート質問用紙の原稿を作り上げ、精査した。日本においての歴史認識が急激な変化を迎えている現在、どのようにドイツの状況との比較検討が可能か、それと文化をどのように関係させることが適切かについて慎重な検討を行った。特にドイツにおけるサブカルチャーの東西格差は大きく、その点をどのように質問紙調査によって引き出すのかについて、関連文献、メディア、インタビューなどを通し、精査した。

またドイツにおける「日本サブカルチャー」とされるものが、実際はアメリカ出自のものや日本出自のものにわけられることも(特にゲームの場合)、インタビュー調査の結果判明し、そうした側面をどのように丁寧に扱うかについて、識者をまじえ慎重な検討を施し、日独比較に耐えうる調査項目の作成・選定を行った。理論的仮説についても言説分析などの成果から一定程度のめどが立ち、2015年実施のウェブ調査に向けての十分な研究体勢を構築したといえる。

また2014年にはライプツィヒ大学、ボン大学にて、日本の現代的状況と表現をめぐるワークショップを行い、「アートワールド」における「日本文化」の位置づけを考察した。ボン大学では、「ワークショップ "Repräsentationen der Erdbebenkatastrophe aufnehmen und neu gestalten: Projekt für ein dynamisches Archiv"」の企画、討論者として、ライプツィヒ大学では、シンポジウム "Erinnerung von der Katastrophe in Fukushima in-mit den öffentlichen Künstlern und Wissenschaftlern, Archiv zu schaffen"」の基調講演を行った。2011年以降、ドイツにおいて日本を捉える目線は東日本大震災・原発事故を抜きにして考察することはできず、広い意味での「日本文化」と「日本の表象に対するまなざし」について議論をした。

また当該年度において、エアランゲン大学で行われた International Conference: Catastrophes, Digital Public Spheres and the Future of Democracy において、関連内容について報告・討論をしたことを付言しておく。

【2015年】

最終年度の2015年には、ウェブ調査の質問策定の最終段階に入ったが、ドイツをはじめとするEU諸国において移民問題が顕在化されことを受け、この点について東西の差異

があるかどうかを質問に含めることとし、情報を収集すると同時に、質問文のあり方について再度検討を行った。その結果、調査実施日そのものは予定よりも遅れたものの、文化・政治・社会に関する日/旧西ドイツ/旧東ドイツ地域の異同を十分な形で検討することができた。調査概要は以下の通りである。

- ・質問紙タイトル「文化とコミュニケーションに関する日独比較調査(日独2ヶ国)」
- ・方法:ウェブモニター調査(マクロミル社)
- ・調査対象者:日独それぞれ2400名ずつ。20歳~50歳までのモニタ。男女比、年齢比割り当て。

日/独の対照、西独/東独の対照など、興味深い知見が得られた箇所に焦点を当てながら、投稿学術論文を作成中である。

なお当該年度には、東京大学情報学環主催のシンポジウム「過去の未来/未来の過去「アニメ・まんがの50年史」」を開催し、若林幹夫(社会学・早稲田大学)、シュテファン・リーケレス(メディアアート)、東園子(社会学・大阪大学)の各氏をお呼びし、多様な角度から、「クールジャパン」を相対化し分析する作業を行った。報告者の一人リーケレス氏はドイツにて『アニメ背景画』展などを開催するなど、積極的な形で「日本的サブカルチャー」の受容に精通しており、三年間の相互の議論の成果をここで報告した形となる。またドイツ・ボン大学の湯川史郎氏をお呼びしてワークショップ「F. M. トラウツがのこしたもの:メディア史のアーカイブとして Hinterlassenschaft の潜在性について」(2015年12月、東京大学)を開催し、日独を生活史の視点から分析する方法論について議論を深めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

北田暁大「「開かれる」のではなく「閉じられているがゆえに開かれている」

社会とアート」藤田直哉編『地域アート』『地域アート 美学/制度/日本』堀之内出版、2016年。(査読無し)

Kitada,Akihiro,"Manga und Kritik – Entwicklungen und Aktualität von Manga-Kritik in Japan" in *Minikomi(84)*, Akademischer Arbeitskreis Japan.2014.p31-34. (査読無し)

〔学会発表〕(計2件)

Kitada,Akihiro, "Catastrophy and Representation" at the International Conference:Catastrophes, Digital Public Spheres and the Future of Democracy (エアランゲン大学、2014年9月、ドイツ).

Kitada,Akihiro,"Problemstellung" "Erinnerung von der Katastrophe in Fukushima in-mit den öffentlichen Künstlern und Wissenschaftlern, Archiv zu schaffen"(ライプツィヒ大学、2014年、6月、ドイツ).

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
成果の一部については、私が主催していた「社会の芸術フォーラム」のサイトを参照。
<http://skngj.blogspot.jp/p/skngj.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者
北田 暁大(Kitada Akihiro)
東京大学・情報学環・教授
研究者番号:10313066

(2)研究分担者
なし ()
研究者番号:

(3)連携研究者
なし ()
研究者番号: